

伊東尾四郎の履歴と研究
——その歩みと県史編纂を中心に——

報告者: 草野真樹

はじめに

伊東尾四郎=明治2(1869).11.3~昭和24(1949).8.24。戦前期、福岡県における地域史研究の第一人者。とくに、数多くの自治体史を編纂。

→代表的著作:『福岡県史資料』計12輯と『福岡県史料叢書』全10輯。ほか『小倉市誌』、『門司市史』、『八幡市史』、『戸畑市史』、『大牟田市史』など5市3郡の自治体史を編纂。

・数多くの貴重な業績に反し、その詳細な履歴と研究活動については、ほとんど知られていない。

→「昭和19年の福岡の戦災で、図書館も、私の家も全焼し資料は全くなかった。これがため、父の著した夥しい著書の全部を正確に記録することはできない」(伊東, 1966, 15頁)。

【報告の目的】

① 伊東の生涯を明らかにしつつ、具体的に第二次大戦前後における福岡県史の編纂過程を中心に検討する。

② 「伊東尾四郎文書」の来歴について。

→1991年、伊東信子氏(※伊東祐俊の妻)より自宅にあった史料群を、(旧)福岡県地域史研究所へ寄贈される(現在は、九州歴史資料館に移管され、引き続き史料の整理を実施中)。伊東家の全焼という事実をふまえると、どのようにして史料は焼失を免れたのか、あるいは何処で保管されていたのか？

※伊東祐俊=尾四郎の長男、内科医。九州帝国大学医学部内科学第一教室にて金子廉次郎、操担道教授らに学ぶ。

1 明治から昭和戦前期までの歩み

(1) 誕生から大学卒業まで

【出生】

明治2年11月3日 伊東謙吉・マセ夫妻の四男として宗像郡東郷村大字東郷に生まれる。

【伊東家】

福岡藩主黒田家の儒臣として、代々儒学を業とする。尾四郎の父謙吉は、文政8年6月筑前国筑紫郡今泉の眞鍋家に生まれ、のち伊東家に養われる。その後、修猷館において同館師員井上佐市に師事し漢学を学び、また大隈言道に師事し和歌を学ぶ。謙吉自身も弘化4年から明治4年まで修猷館の教官を勤め、その後、宗像郡内の小中学校、公立嘉穂学校、県立農学校などで教鞭を執った(荒井編, 1929, 425~426頁; 伊東編, 1944, 634~636頁)。

※眞鍋安貞(後に伊東祐思、通称謙吉)=生家は大隈言道の旧宅ささのや(現・今泉公園)の隣(伊東編, 1932a, 56~62頁)。

【中学~大学】

明治19年3月福岡中学校初等中学を卒業。明治25年7月第一高等中学校本科第一部を卒業。29年7月帝国大学文科大学国史科(現・東大文学部歴史文化学科)を卒業。

→4期生。同期生=黒板勝美(日本古文書学)、内田銀蔵(日本経済史学)など(東京大学文学部編, 2005)。

(2) 教員・福岡県立図書館館長時代

【故郷へ戻り教員に】

学生時代からの脚気に悩まされ、周囲から田舎での治療を進められた結果、早々に故郷へ戻り、明治30年8月豊津尋常中学校に赴任、歴史を担当(福岡県立豊津高等学校編, 1958, 196頁)。明治41年3月、福岡県立小倉中学校の開校とともに初代校長として転任。

【図書館館長】

大正5年9月 図書館初代館長に就任 → 館の充実を図るべく図書や郷土資料を整備。

※貴重書であったシーボルトの著作「NIPPON」「Fauna Japonica(日本動物誌)」「Flora Japonica(日本植物誌)」「日本書篇」を揃える。

・購入の経緯

「是等の書が丸善に売物に出た時、私はこれを我図書館に備へたくてたまらず、逸早く取寄せてもらつたけれども、県費で購入することは出来ず、非常に困つたが、東奔西走の末、終に安川敬一郎、麻生太吉二氏の厚意によつてこれを買収し二氏の寄贈書として永く本館に保存せらるゝことになつた」(伊東, 1921, 21~22頁)

→伊東尾四郎発・麻生太吉宛書簡(大正6年12月5日)

「謹啓 寒冷之候、愈御清康奉賀候。扱先日御地へ参り拝眉ヲ得度存、郡長ヲ介シ御都合御伺申上候処、御多忙ニテ拝眉ノ機ヲ得ズ候へ共、御伺申上候件ニ関シテハ郡長マデ御話被下難有奉存候。即シーボルト著書類寄附金トシテ金壹千円支出ノ件御承諾被下候ニ付、其趣ヲ安川様へ申上、残金参千円ヲ安川様ヨリ支出ノ事御願致御承諾ヲ得申候。就テハ甚恐縮千万ニ候へ共、年末マデニハ丸善へ支払度存候ニ付金壹千円御送金被成下度候。偏ニ御願申上候 敬具」(麻生家文書 T6-856, 九州大学附属図書館付設記録資料館所蔵)

→安川敬一郎3,000円、麻生太吉1,000円、両名で計4,000円を負担し、購入に至る。

【その他】

・維新史料編纂事務局嘱託、同局編纂官に藤井甚太郎(維新史料編纂会, 1921, 44~45頁)。

・福岡県立女子専門学校にて国史を担当(福岡女子大学編, 1973, 378頁)。

・史蹟名勝天然記念物調査委員(福岡県)。

(3) 自治体史編纂の開始

昭和5年5月 図書館を定年退職。

昭和6年9月 一家は終の住処となる福岡市中庄町9番地へ転居。

【自治体史編纂の開始】

『京都郡誌』(大正8年)、『小倉市誌 上編・下編』(同10年)を編纂。さらに福岡県史料調査編纂嘱託として『福岡県史資料』の編纂を担う。

【編纂の基本方針】

「古代よりも近代に重きを置き、治乱興亡に関する資料よりも、民政に関する資料を多く採録」する(伊東編, 1932b, 例言)。

→専門とする文献史学の立場から古文書等の一次史料を重視し、その幅広い調査・収集を原稿に反映させる。

→調査の一例(伊東尾四郎文書・書簡533)

(一) 神事仏事等特種ノ行事アラバ其大要

- (二) 特種ノ風俗習慣アラバ其大要
- (三) 特種ノ民謡舞踊アラバ其大要
- (四) 盆踊アラバ其行ハルハ地域
- (五) 大庄屋庄屋戸長ヲ勤メシ家或ハ旧家等ニ書付帳面記録等ヲ保存セル家ナキカ
- (六) 古老ノ人ニシテ旧藩時代或ハ明治時代初期ノ事ヲ語り得ル人ナキカ

※「次に次のやうな質問を發してみる。『明治二十二年は町村の大合併が行はれたが、其の時の事情や、土地戸口の事など書いたものは、ありませんか』。私は幾人かの町村長にお尋ねしたが、『そんな物はない』と答へられる方が多い。(略)一枚の借用証文、一枚の売渡証文でも、当時の生活状態を窺ふべき史料になることを知らねばならぬ。(略)町村史研究の一方法として、老人の来会を乞ひ、座談会を開くことは、最も有意義である」(伊東, 1933, 47~48頁)。

【本格的な自治体史編纂と研究】

- ・昭和7年から『福岡県史資料』を刊行, 14年までに計10輯を完成。
- ・『福岡県史資料 続第一輯・伝記編一』(同16年)と同『続第四輯・地誌編一』(同18年)の2輯を追加刊行。
- ・『企救郡誌』(昭和6年), 『宗像郡誌 上・中・下編』(同6~19年), 『門司市史』(同8年), 『八幡市史』(同11年), 『戸畑市史』(同14年), 『小倉市誌 続編』(同15年), 『大牟田市史』(同19年)など5市3郡の自治体史を次々と編纂。
- ・『久留米市誌 上・中・下編』(昭和7~8年), 『鞍手郡誌 全』(同9年)の編纂顧問。
- 県内各地の自治体史編纂を担い, また各地での講演を引き受けるなど, 戦前期福岡における地域史研究の第一人者として指導者的役割を果たす。
- ・多くの個別論文も発表。
- 学会活動では社会経済史学会に所属し, 「北九州の社会経済史料に就きて」, 「天保十年肥前松浦郡の一揆」, 「徳川時代に於ける農村人口の停顿状態」, 「彦山・檀家売渡証文類」などを発表。ほか『歴史地理』などの学術誌にも投稿。加えて, 『筑紫史談』をはじめ『福岡県人』, 『地方自治』, 『福岡県教育』など地元雑誌に多くを寄稿。
- 充実した研究期を過ごす。

(4) 第二次大戦期

【第二次大戦の勃発と戦局の悪化】

- ・昭和20年6月19~20日 福岡大空襲
- =福岡県立図書館, 伊東家ともに焼失 → 貴重な図書, 史料類の多くが焼失
- ※「福岡県立図書館ハ多数ノ郷土関係図書ヲ集メシカ, 昨年〔昭和20年〕ノ罹災ニテ殆ト全部ヲ焼失セリ。疎開セン書類ハ極メテ少数ニ過キス」(昭和21年2月3日)
- ・7月上旬 娘の秀子とその子供らと共に, 英彦山の麓に位置する田川郡添田町落合に疎開。
- ・大空襲後四女はるえの書簡
- 「お父様! お父様! ようこそ御無事でみて下さいました。(略)お年召したお父様が火の中をお逃れになった御様子を想像するさへたまらなくなって泣いてしまいます。(略)お姉様一家と彦山麓に疎開なさいませ由, 少しでも安らかな御生活が出来ます様にお祈りいたします。(略)お父様は疎開先でも本と取組むことを考へておられて其意気にはほんとうに嬉しくなってしまうますが, でも余り無理をなさらずのん気に遊ぶことも考へて下さいませ。お体を御大事に かしこ」(伊東尾四郎文書・書簡208)
- ・昭和20年8月15日 疎開先で終戦を迎える。

2 第二次大戦後の歩み

(1) 戦後の生活

【帰 福】

- ・昭和20年8月22日 疎開先から戸畑へ移り, 9月中旬帰福。
- 福岡で仕事を再開するため, 子供・孫たちが戻ってくるであろう福岡に住居を構えておきたいため。帰福後すぐに福岡県建築課の設計による12坪型組立住宅を申し込む(伊東尾四郎文書・書簡206)。
- ・昭和20年9月 四女はるえとその子供ら帰国
- ・12月初め完成=新聞社の取材, 組立住宅としては福岡市では最初のもの。
- ※「出来上つた組立住宅 福岡市では一番乗り」(『西日本新聞』昭和20年12月9日)
- 「福岡県建築課で設計した十二坪組立住宅が福岡市本庄町の焼跡に出現した。組立住宅としては同市では最初のもので, 基礎工事を終つて材料を持って来れば大工さん四人で二日かかつたら人が住めるやうになる。間取は六畳一間に四畳半二間, 炊事場, 便所, 押入, 玄関は勿論ついてゐる。材料は製材三十石, 釘二十四キロ, 粘土瓦千八百枚, ボルト十二キロで壁土は用はず全部板壁だから簡易な割合に板は喰ふ」
- 建築費は, 計2万5,606円50銭
- ・次男と義理の息子を戦争で亡くす。
- ・昭和21年6月3日 有光教一(四女はるえの夫。京都大学名誉教授, 元奈良県立橿原考古学研究所所長, 元高麗美術館研究所所長)帰国。朝鮮考古学のパイオニア
- ※「私は, 眼前にひろがる廢墟のような福岡市街の惨状に帰国のよるこびも消え, 沈痛な気持ちで雨に濡れながら上陸した。…私は妻の実家にたどりつき, 十カ月ぶりに妻子と再会したが, こども空襲で焼け, 仮小屋住いであった」(有光, 2007, 110頁)。
- ・昭和21年7月10日 長男祐俊家族が満州より帰国

【質素な生活】

- ・厳しい食料事情=甘藷, パン, 銀飯, 粥, 団子汁など。外出の際は弁当持参。
- ・配給=米, 藷, メリケン粉, 乾麺, 蒲鉾, バター, 醤油, 酒, 煙草, 豆炭などほか。
- 「藷質直シカラス」(昭和21年10月29日), 「配給ノメリケンコパン, 色悪ク交リ物アリ」(昭和22年4月25日)
- 親類や知り合い同士での助け合いで乗り越える。また, 正月, 孫の誕生日や運動会など「ハレの日」には, 出来る限りの御馳走を用意。孫の健やかな成長が大きな喜び。

【再出発の宣言】

- ・昭和22年11月 再出発を宣言
- 「私方罹災全焼せしのみならず陸海軍戦死者も出し災厄続出し為に心身全く衰弱仕候, (略)罹災跡地にささやかなる内科小児科医院を開き申候, 私も茲に漸く元氣を得, 父子相携へて人生再出発の途に就くことに致し申候」(伊東尾四郎文書・書簡540)
- 焼失した自宅跡地に長男祐俊が「伊東医院」を開業(正式開業はもうしばらく後と思われる)。

(2) 県史編纂の再開に向けて

【編纂の再開に向けて】

- ・体調がよい時は県庁庶務課別室史料編纂所に出勤。県庁では編纂に向けた作業を進めるとともに, 関係者らに面会し, 県史再開への協力を仰ぐ。
- ・各地の役場, 神社, 郷土史家などに質問を認めた書簡を送り疑問点の解明を続ける。
- 「元岡村の大庄屋浜地氏の子孫は今も在りますか。若在つて昔の帳面とか書付とか残つて居るなら拝見に行きたいと思ひます。一応御調下さつて様子を御一報願ひます」(伊東尾四郎文書1089)

【体調の悪化と編纂態勢の変化】

・体力の衰え、腰痛、腹痛などの理由から出勤を控える日が増える。現地調査なども断念。

・戦後復興期における県史編纂と史料編纂所業務の存在意義

→現実問題として、おそらく低下。

→県庁内において度々、史料編纂所室の移動を余儀なくされる。

「参事会室ノ予ノ室、又人入り物品ヲ動かセリ。到底県ノ建物ニテハ仕事出来ズ」(昭和21年12月23日)。

※上記は「史料編纂所の存在意義は低い」と主張するのではない。周知のとおり、戦争は多くの歴史的文化遺産や公文書などを破壊、焼失させる。また、日本においても戦後、隠蔽を目的とした公文書の焼却と隠匿が行われた(吉田, 1997)。本来的には終戦直後だからこそ、歴史遺産や記録史料の緊急的な保存活動が求められる。ただし、現実的には政策や事業の優先度、予算の配分の問題等が生じ、史料編纂所業務の存在意義が低下することはあり得るであろう、という意味である。

【戦後復興期・混乱する行政】

・伊東は戦前期に『直方市史(誌)』の編纂を引き受けていた。

「一、直方市史編纂ハ香月市長の時決定、予算も計上され草稿も上代より明治時代までハ大体脱稿致居候

一、万事不安定の時代、会社とか産業とか教育とか凡現代的の部ハ此際起稿を見合すこと

一、明治時代までの分を完成し、これを直方市史資料と題する稿本とし一応打切とする事」

(伊東尾四郎文書 1089)

→草稿の執筆を終えていた伊東は、『直方市史資料』として具体化しようと提案。以下、直方からの返事。

「直方市誌の件は香月市長より清水市長を経て、無事行実市長と代替り致し口口、市勢甚急廻之情況ニ而、此際市誌編纂等は忘れられてはいまいかと存し候、一応市長へ交渉、御返事可申候」(伊東尾四郎文書・書簡 434)

→刊行に至らず。

【史料の移動】

・体力と執務両面の問題に直面

→史料編纂所を自宅に置くことを担当者に相談。昭和22年3月24日、許可を得た伊東は編纂所所蔵史料を自宅に運び入れる。以後、県庁ではなく、主に自宅で仕事を進める。

【史料の来歴】

伊東家の焼失、県庁史料編纂所からの史料運搬という事実をふまえると、後年、伊東家から福岡県地域史研究所へ寄贈された史料群は、もともとは県庁の史料編纂所由来の史料群ということになる。ただし、伊東尾四郎文書の史料来歴については、史料編纂所の所蔵経緯を含め、まだ不明な点がある。この点については、引き続き検討すべき課題。

(3) 『福岡県史料叢書』の刊行

【刊行の決定】

・昭和22年8月18日 伊東は庶務課の笠原・田中氏より来庁されたしとの連絡を受け、翌日出庁。ここで、伊東は笠原氏から知事が県史編纂の予算を組めと部課長会の時に話されたことを告げられる。

→11月27日 秀巧社(福岡市)から出版費の見積もりを取り、笠原氏に対し3万円の支出を得れば直に『福岡県史料叢書』第1回を発刊したい旨を述べ、庶務課長より同意を得る。

→伊東、「叢書創刊ノ見込立ツ、慶賀々々」と喜びの心情を吐露。

【県史資料編纂事業の概要】

「県史資料編纂事業ノ概要」(作成年不詳〔第二次大戦後〕、整理中史料)

「前編拾冊ハ学界ニ於テモ好評ヲ博セリ。所載ノ文献ハ今日既ニ焼亡セルモノ少カラズ、今ヨリ考フレハ貴重ノ文献ヲ蒐集シ之ヲ検討編纂公刊シ、印刷亦鮮明ニシテ而モ廉価ナリシコトハ本県ノ為ニ幸ト言ハサルベカラズ

後編拾冊ハ伝記編、地誌編、明治編ニ別チ、伝記編壹冊、地誌編壹冊ヲ公刊セシガ其ノ後時局ノ為印刷困難トナリ殊ニ印刷所東京三秀舎罹災ノ為公刊ヲ中止スルニ至リ、三秀舎ハ罹災後、大日本印刷会社ニ合同ノ姿ニテ瓦斯ノ供給可能トナレハ同社ニテ公刊ヲ引受クルニ至ルベシ聞編ノ原稿ハ大半既ニ成レリ、此原稿ハ幸ニ罹災セズ」

→後編の構成

「伝記編三冊、地誌編五冊、明治編二冊計拾冊刊行の予定であつたが、伝記編一冊、地誌編一冊だけ刊行して中止状態になつて居る」(伊東, 1949, 編輯後記)

→既に、昭和14年時点において印刷を担当していた三秀舎(東京)では「工務員中軍需工場等へ転職致す者続出致し人員に不足を相生じ」る状況(伊東尾四郎文書・書簡 194)

→『筑前国統風土記附録』を収録する『県史資料 続第五輯』は入校済であつた。

「県史資料続第五輯(筑前国統風土記附録)の原稿類は無事の由、当分印刷も不可能と存候ニ付、原稿類一切御返送方前便にて申入候へとも、今に送附これ無く、右は時々閲覧の必要有之候ニ付、何卒至急御返送下され度、(略)私の自宅も罹災、目下左記の処に仮寓仕候、小包は此処へ御送願上候」(伊東尾四郎文書・書簡 126, 未発状)

【二案の提示】

・昭和23年1月 伊東から県担当者に二案を提示

A=『県史資料』案は、A5版・600頁以内・1年に1回発行・4回にて完

B=『県史料叢書』案は、A5版・100頁以内・1年に3~4回発刊・10回にて完

→後者Bに決定。

→『県史資料』の普及版とも称すべき『叢書』の刊行から着手。「鹿野氏」と吉浦善三郎氏のサポートを受けつつ、伊東は原稿の執筆と修正、校正に全力を注ぎ、わずか一年数ヶ月の間に各輯80頁前後からなる『県史料叢書』全10輯を完成。

※昭和23年8月、それまで伊東の編纂を補佐していた「鹿野氏」が病気で死去したため、吉浦氏が後任となる。その後、2度目となる県史編纂は玉泉大梁氏に引き継がれ、玉泉氏もまた吉浦氏を助手として、古代から明治4年廃藩置県までの『福岡県史』4巻計8冊を刊行した。

【小括】

戦後、伊東は『福岡県史資料』の復活を企図した。ただ、同時に、年齢と体調不良からおそらく最後の仕事となるであろうことも感じていた。伊東にとって『福岡県史料叢書』は、戦後の物資不足に伴い小冊子として刊行したのであり、目標は『県史資料』後編の完成にあつた。

戦後の混乱期において、県の理解のもと『県史料叢書』を発刊できたことは、前述した直方市の経験をふまえると、幸運であつたと言えるかも知れない。しかし、ここに第二次大戦を経験した伊東の思いと努力は明記されねばならない。すなわち「罹災して多くの史料が滅び(略)今編者が書き残して置かねば、判らなくなるものが少なくない」(伊東編, 1948b, 編集後記)という危惧が死去の直前まで筆を走らせたのである。

むすびにかえて——編纂のあり方——

【伊東の編纂スタイル】

- ・一次史料の復刻・抜粋に重点を置く。
- ・地域史研究のための基礎史料を出来る限り網羅する。
- 地域史研究にとっての基礎文献となるばかりでなく、「文献には〔福岡大空襲により〕焼亡したものが相当に多」(伊東編, 1948a, 発刊の辞)だったため、今日においても学術的価値を保つ。
- 読み物としての県民読本的な自治体史を優先すべき(大濱, 2007, 49頁)かどうかは、議論の余地がある。
- どのような目的で、どのような形態や内容の自治体史を編纂するのか。
- ※商業的に売れ行きの良い本や受けの良い本が必ずしも「良書」とは限らない。

【子から見た父・尾四郎】

「父は本職の学校のことに、図書館のことに熱心であったが、余暇と余生を挙げて、郷土史研究に打ち込んでいた。清貧に甘んじ、仕事の中に喜びを見出すという、生活態度で一生を貫いた」(伊東, 1966, 16頁)

→福岡藩ならびに広く県内各地域を網羅した福岡県史の研究に生涯を捧げ、数多くの貴重な業績を遺し、昭和24年8月24日、自宅にて没。

[主たる参考文献・文書]

荒井周夫編纂(1929)『福岡県碑誌 筑前之部』大道学館出版部。

有光教一(2007)『朝鮮考古学七十五年』昭和堂。

維新史料編纂会(1921)「第十四回顧問及委員会紀要」同会。

伊東尾四郎(1921)「黒田侯とシーボルト」、『筑紫史談』第23号, 所収。

伊東尾四郎文書(整理中) 九州歴史資料館所蔵

伊東尾四郎編(1932a)『さゝ乃や記』生井薫発行。

伊東尾四郎編(1932b)『福岡県史資料 第一輯』福岡県。

伊東尾四郎(1933)「町村史の研究」、『地方自治』通巻第59号, 所収。

伊東尾四郎編(1944)『宗像郡誌 上編』。

伊東尾四郎編(1948a)『福岡県史料叢書 第老輯』福岡県。

伊東尾四郎編(1948b)『福岡県史料叢書 第弐輯』福岡県。

伊東尾四郎編(1949)『福岡県史料叢書 第拾輯』福岡県。

伊東尾四郎編(1975)『京都郡誌』美夜古文化懇話会, 復刊版。

伊東祐俊(1966)「父の思い出」、『宗像』通巻172号, 所収。

大濱徹也(2007)『アーカイブズへの眼』刀水書房。

東京大学文学部編(2005)『東京大学文学部 日本史(国史)学科卒業生名簿』東京大学文学部。

福岡県立豊津高等学校編(1958)『福岡県立豊津高等学校七十年史』同校。

福岡女子大学編(1973)『福岡女子大学五十年史』同校。

森田千恵子(2009)「なぜ、福岡県立図書館にシーボルトがあるのか」, 宮崎克則・福岡アーカイブ研究会編『ケンペルやシーボルトたちが見た九州, そしてニッポン』海鳥社, 所収。

吉田裕(1997)『現代歴史学と戦争責任』青木書店。

表1 伊東尾四郎年譜

年 月 日	事 績
明治 2 11 3	伊東謙吉・マセ夫妻の四男として、宗像郡東郷村大字東郷492番地に生まれる
19 3 25	福岡中学校初等科卒業
25 7 21	第一高等中学校本科第一部卒業
29 7 11	帝国大学文科大学国史科卒業
7 30	父謙吉死去
30 4 23	福岡県立豊津尋常中学校に赴任
34 3	富山房より『国史要』を刊行
35 4	森岡書店より『太宰府めぐり』『福博誌 全』を刊行
36 11	富山房より『西洋史略』を刊行
41 3	福岡県立小倉中学校初代校長(中学校は同年開校)
大正 5 1	中学校長退職
9	初代福岡県立図書館長に就任
8 12	『京都郡誌』刊行
10 7 28	『小倉市誌 上編・下編』刊行
12 3	福岡県立女子専門学校講師嘱託
4	公立専門学校教師兼任
14	柴田善三郎知事を脱き、福岡県史料調査編纂事務を発足させ、以後、同事務嘱託
昭和 3 11	文部大臣より社会教育功労者として表彰を受ける
5 5	福岡県立図書館を退職。公立専門学校教授を専任、県史料調査事務嘱託
6 4	『企救郡誌』刊行
9	福岡市中庄町9番地に転居
12 1	『宗像郡誌 中編』刊行
7 6	『福岡県史資料 第1輯』刊行
11 20	『宗像郡誌 下編』刊行
8 3 29	『福岡県史資料 第2輯』刊行
8 30	『門司市史』刊行
9 5 20	『福岡県史資料 第3輯』刊行
10 3 31	『福岡県史資料 第4輯』刊行
5 25	『福岡県史資料 第5輯』刊行
11 3 31	『八幡市史』刊行
5 25	『福岡県史資料 第6輯』刊行
12 5 15	『福岡県史資料 第7輯』刊行
5 20	『福岡県史資料 第8輯』刊行
13 6 30	『福岡県史資料 第9輯』刊行
14 12 10	『戸畑市史』刊行
6 15	『福岡県史資料 第10輯』刊行
15 12 16	『小倉市誌 続編』刊行
16 3 25	『福岡県史資料 続第1輯・伝記編1』刊行
17 4 13	妻死去
18 3 29	『福岡県史資料 続第4輯・地誌編1』刊行
3 31	大牟田市史編纂事務嘱託を解かれる
19 5 30	『大牟田市史』刊行
6 15	『宗像郡誌 上編』刊行
20 3 31	官幣中社英彦山神社より「由緒調査委員」を解嘱され、「史料調査事務」を嘱託される
6 19	福岡大空襲により自宅全焼
7 上旬	娘秀子らと共に田川郡添田町落合に疎開
8 15	終戦
8 22	戸畑へ移る
9 16	福岡市内に家を借り、県庁へ通勤を再開
9	四女はるえと子供ら、朝鮮より帰国
21 6 3	有光教一(四女はるえの夫)、朝鮮より帰国
7 10	長男祐俊、満州より帰国
22 2 1	福岡市史編纂事務嘱託
11	長男祐俊、罹災跡地(中庄町9番地)にて内科小児科医院を開業
23 5 20	『福岡県史料叢書 第1輯』刊行
7	薬王密寺東光院国宝保存顕彰会参与
8 20	『福岡県史料叢書 第2輯』刊行
12 15	『福岡県史料叢書 第3輯』刊行
24 3 3	『福岡県史料叢書 第4輯』刊行
5 3	『福岡県史料叢書 第5輯』刊行
5	門司市史増補調査事務委嘱
6 3	『福岡県史料叢書 第6輯』、『同 第7輯』刊行
7 18	『福岡県史料叢書 第8輯』刊行
8 8	『福岡県史料叢書 第9輯』刊行
8 24	自宅にて死去
9 3	『福岡県史料叢書 第10輯』刊行

出所: 伊東尾四郎文書, ほか各種文献より作成。

注: 1. 事蹟は史料と文献より確認し得たもののみ記載した。また, 著作は主たるものに限定し, 個別論文等は割愛した。

2. 年月日に齟齬がみられる場合, 伊東尾四郎文書より確認できるものはそれを優先した。